

## 鎌倉花火

金曜日の午後は手術日になっているので、いつもならまだ仕事中的なだけけど、今日は全く何も無し。何度か時計を見ながら五時になるが早いかな、すぐに私服に着替えて病院の裏門から外に出る。

この季節、お盆の前なので手術はなるべく控えたいという人が多いし、一族顔を揃えるのを機会にちよつと早くても退院したいという人もあって、外科外来は患者も減るし入院病棟も空床が増える。診療圏の広くない中規模の病院は地域の人々の暮らしの変化をモロに受けて閑忙に波がある。年の瀬、正月もそうだが八月のお盆もまた、年に二度ある「ふるさと」が主役の季節で今日がそんな日。

それに例年八月十日は鎌倉海岸の花火大会の日である。曜日には関係なく毎年十日と決まっているという。何故だか理由は知らない。

我が家から由比ガ浜海岸まで歩いて二十分ほどだし、そういうわけで夜まで仕事が延びることがあまりない日なのと（実はこの日、意識してそうしているせいもあるが）、それに何よりも花火が大好きなのとで、この十年来見物を欠かしたことはない。ただ一昨年だったか、よく晴れているのに風が強いという理由で中止になったことがある。鎌倉の花火はちよつと変つていて、沖合いの台船から打ち揚げられるのを海岸から見物するのである。呼び物は疾走する舟から花火を矢継ぎ早に海中に投げ込んで水面で炸裂させる、水中花火」という趣向で、確かに他のどこの花火大会でも見たことはない。二時間ほどの間に三回くらいこのシリーズがあるが、これが始まると材木座沖からドカンドカんと大音響とともに海面に金色に輝く光の噴水が続々と出現する。それが由比ガ浜沖に向かって繋がり、同時に台船から打ち揚げる大玉も頭上で炸裂し続けるから、浜辺は真昼のように照らされて、歓声とも嘆声ともつかぬ観衆のどよめきが舟の動きにつれて浜辺を移っていく。走る舟から放り込む花火だから晴天であつても海が荒れると出来ないのも無理はない。

「水中花火」にどうしてこんなに興奮させられるのか考えてみると、展開した花火を地上から見上げるのではなくて、すぐ傍に眼の高さで横から見ているからではないだろうか。爆心が眼の前だから暗闇から噴きあがる光の粒や束が大きい。天地創造もかくやというばかりの眩しさ、重くて腹に響く破裂音も快い。四方八方端正にまるく開くように造られた花火をわざわざ水中に投じて半分にして観るのは贅沢だし勿体無い話で、苦心して造った花火屋さんには申し訳ないが、巨大な光の扇が目の前に輝いている時はそんなことは忘れてる。

普段、季節感のある行事に参加することは殆どなく、日常の暮らしがのっぺりして節目を無くしている中で、花火見物は何もしないで砂浜に座っているだけのことはあるが、いやそれだけに気楽で、子どもの時の早く来い来いお正月の気分がある。

しかし大人になってしまったということは仕方のないもので、花火、大好きの気持はもう少し複雑である。

つかの間の閃光と、後に残る黒い夜空を見上げている時の漠然とした感慨は、突き詰めてみればやはり無常迅速、いのちのはかなさを歎ずる気持ちに似ている。いくら豪華な光模様であつても、いや豪華であればあるほど、燃え尽きた後の空虚の方が心に残つて、寂しい。毎年同じ日、同じ夜というのも一年の短さが身に沁みて、無常を観じるために見物に行く行事にふさわしい様な気がする。

それに、花火の駆け昇つていく鋭い音と眼くらめく火の色からどうしても四十年前の空襲を思い出してしまふ。尺玉が頭上に大きく散開するのは、次々に無数の火の玉に分裂しながら斜めに降りそそいできた焼夷弾にそっくりである。夜空一杯に拡がった火の雨に降り込められてどこにも逃げる場所がないとは感じたが、どういわけか怖かつたという記憶はない。九歳だつた。

花火を見るたびに空襲の話が聞かされる女房はこの頃生返事をするだけである。母親が焰を掻いくぐつて抱いて逃げてくれたからこそ今日ここにこうして居られるわけだといつても、なにしろ二歳の時のことでまるきり記憶にないのはやむを得ないか。義母は東京の蒲田で罹災後、乳母車を押して信州佐久まで歩いて落ち延びたのだそうだ。一週間かかつたという。

あれ以来、日本では四十年も空襲はなくて、それがどんなものか知らない人の方が多くなつた。歴史を見れば戦乱、天災、飢餓、地震など大変事の連続なのに四十年も平和が続くなんてまるで奇跡ではないか。私達はどうかやら歴史の谷間、年表の折り目を、クリオの神がちょっと脇見をしているうちにすり抜けて、ほんのつかの間だつたかもしれない平和をまるまる楽しんでしまつた、えらく幸運な世代であつたらしい。

我が家の最盛期には花火見物に、真鴨の親子よろしく四人の子供たち全員を引き連れて出かけたものだけけど、連中の長ずるに及んで、親と行くよりは友達との付き合いが大事という者あり、たかが花火、毎年観たところで趣向さして変らずと斜めに構える者あり、家長の統制緩み、家族全員揃うことは珍しくなつた。この具合だと数年先は二人きりでしようネ、と女房が淋しそうな顔をする。それはそうだが戦友よ、何を嘆くことがあるうか。振り出しは二人、三倍に膨張したのもほんの一時の現象に過ぎない。むしろ連中の親離れを喜ぼうよ。

今夏はしかし、十九歳の長男が帰省して来て、親孝行のつもりか、誰かに振られたか、一緒に行きたいという。昔懐かしいゴザはもう無くてビニールシートと団扇を持って、少

し早いが七時には三人で出かけた。まだ明るい由比ガ浜は人の波である。

(五時通信 第一〇七号 一九八四年九月十日)